

「貨幣の資本への転化」の論理と歴史

—宇野弘蔵教授の所説によせて—

佐藤金三郎

「貨幣の資本への転化」の問題は、周知のように『資本論』では第1巻・第2篇(第4章)で取扱われているが、近年わが国では、マルクスのこの問題の取扱いをめぐって、これを疑問視する一部の論者の主張を契機として、きわめて活発な議論が展開されつつある¹⁾。この小論の目的は、右の論争をうみだしたいわば根源ともいべき宇野弘蔵教授の所説を検討しつつ、『資本論』における「貨幣の資本への転化」の分析の意義をあきらかにすることにある。

I

周知のように、『資本論』の貨幣の「資本への転化」の章の第1節は、資本成立の「歴史的前提」についてのつぎのような叙述から始まっている。

「商品流通は資本の出発点である。商品生産と発達した商品流通すなわち商業とは、資本が成立するための歴史的前提をなしている。世界商業と世界市場とは、16世紀に資本の近代的生活史を開くのである²⁾。」

つづいてマルクスは、「商品流通の最後の産物」である「貨幣」が「資本の最初の現象形態³⁾」であることを指摘したのちに、つぎのように述べている。「歴史的には、資本は、土地所有にたいして、どこでもまず貨幣の形態で、貨幣財産として、商人資本と高利資本として、相対する⁴⁾。」マルクスは、『資本論』のべつのところでも、世界市場を主要な活動舞台とした商人資本が「資本の歴史的に最も古い自由な存在形態⁵⁾」であり、資本のいまひとつの「大洪水以前の⁶⁾」形態である高

利資本とともに、その一定程度の発展が「資本の近代的基本形態⁷⁾」である産業資本の成立のための歴史的前提であったことを繰り返して述べている。

にもかかわらず、マルクスは第4章ではこの問題をこれ以上追及することなしに、さきの引用につづけてつぎのように述べている。「とはいえ、貨幣を資本の最初の現象形態として認識するためには、資本の成立史を回顧する必要はない。同じ歴史は、毎日われわれの目の前で繰り広げられている。今もなお、新たな資本はすべて、最初はず貨幣として一定の過程をへて資本に転化されるべき貨幣として、舞台に、すなわち商品市場や労働市場や貨幣市場といった市場に現われるのである⁸⁾。」以下、第1節では、「直接に流通部面で現われる資本の一般的定式⁹⁾」 $G-W-G'$ の誘導が、「資本の成立史」をなんら「回顧する」ことなしに、もっぱら理論的な仕方で、すなわち第1巻・第3章の分析ですでにあきらかにされている「貨幣としての貨幣」の流通形態 $W-G-W'$ と発達した資本主義社会の表面的過程で現に与えられている「資本としての貨幣¹⁰⁾」の流通形態 $G-W-G$ との相違——「形態的区別」と「内容的区別¹¹⁾」——をあきらかにすることによって行われていることは、すでに周知のところであろう。第2節と第3節においても同様である。

要するに、産業資本以前に出現し、その成立の歴史的前提であった商人資本と高利資本とは、第4章における「貨幣の資本への転化」の理論的分析に際しては、マルクスによって「さしあたり

1) 拙稿「経済学体系における論理的展開と歴史的発展」『経済評論』1962年12月号参照。

2), 3), 4) *Das Kapital*. Bd. I. bes. v. MEL-Inst. Moskau. Berlin, 1953.(以下 K. I. と略)S. 153.

5) K. III. S. 356.

6) K. I. S. 171.

7) K. I. S. 172.

8) K. I. S. 153.

9) K. I. S. 163.

10) K. I. S. 153.

はまったく顧慮されずにおかれ¹²⁾」ているのである。これらの資本諸形態は、周知のように『資本論』では第3巻で始めて分析され、産業資本の「派生的形態¹³⁾」として取扱われている。この取扱いは、あきらかに資本の「発生史的な発展順序¹⁴⁾」と一致していない。むしろ、「科学的分析の歩み¹⁵⁾」は、この場合「歴史的発展の歩み」と「まさに逆¹⁶⁾」である。

これにたいして、もしも「貨幣の資本への転化」の理論的分析が資本の「歴史的発展の歩み」に厳格に一致すべきであるとするならば、マルクスは産業資本の本質の解明にさきだって、なによりもまず資本の「大洪水以前のな」形態である商人資本と高利資本の本質をあきらかにすることから研究を始めなければならなかったであろう。けれども、『資本論』はあきらかにそうしていない。すでにみたように、マルクスは第4章では資本の前期的諸形態をむしろ意識的に捨象しているのである。分析は、ここでは資本の「歴史的発展の歩み」を辿ることなしに、あるいは資本の「発生史的な発展順序」を単純に追うことなしに行われている。すなわち、「貨幣の資本への転化」の分析は、研究対象として前提されている発達した資本主義社会の表面的過程における外的現象、すなわち流通における貨幣の「増加」という周知の事実から出発しつつ、この現象の本質の解明をめざして「純粹に理論的な仕方¹⁷⁾」なされているのである。

だから、第4章におけるマルクスの取扱いは、一見したところ論理と歴史との結びつきをひき離しており、したがってしばしば『資本論』の方法の核心をなすといわれている論理的なものとの歴史のものとの照応という「原則」をマルクス自身が破壊しているように見えるのである。はたして、そうであろうか。わが宇野教授がマルクスを非難

されるのも、まさにこの点にかかっている。

II

ところで、「貨幣の資本への転化」をめぐる論争の発端をなした宇野教授の問題提起とは、つぎのようなものであった。教授はいう、「商品及び貨幣と貨幣の資本への転化とは、これを『資本論』の場合簡単に商品、貨幣、資本の3段の展開と解してよいかどうか、それは少々疑問である。実際又マルクスにあっては、この篇は商品、貨幣の場合とは説き方が異なって来ている。……勿論、ここでも直ちに商人資本、高利貸資本、産業資本というような具体的な歴史的な、形態規定を与うべきものではないと思うが、商品・貨幣の場合から考えると、一般的に資本の規定にもそういう歴史的形態に対応した理論的把握が出来るのではないかと考えられる¹⁸⁾。」みられるように、ここではまだきわめてひかえめな形ではあるが、ともかくすでに教授のマルクス批判と教授自身の積極的見解とが述べられている。すなわち、その第1は、『資本論』にあっては第1巻・第1篇「商品と貨幣」の場合と第2篇「貨幣の資本への転化」の場合とでは論理の展開の仕方が相違しているということ、したがって第2に、『資本論』は商品・貨幣・資本の「3段の展開」をなしているとは「簡単に解し」えないということ、だが第3に、資本の一般的規定には、「商品と貨幣」の場合と同様に、商人資本・高利資本・産業資本といった資本の具体的な「歴史的形態に対応した理論的把握」がなしうるということである。つまり、第1点は『資本論』の第1巻・第1篇と第2篇の展開方法についての教授の解釈であり、第2点は『資本論』の「難点」の指摘であり、第3点は教授自身の積極的見解の呈示である。

ところで、右の第1点で宇野教授のいう『資本論』における「商品と貨幣」の場合と「貨幣の資本への転化」の場合との「説き方」の相違とはいったい何かといえ、それは要するに前者では論理的展開が同時に商品・貨幣の「発生史的な発展順序」を示しているのに対して、後者ではそうな

11) K. I. S. 155. 12) K. I. S. 171.

13) K. I. S. 172.

14) 宇野弘蔵『経済学方法論』(以下『方』と略)316ページ。

15) K. III. S. 317. 16) K. III. S. 318.

17) Черковец, В. Н., «Превращение денег в капитал». Москва. 1960. стр. 9.

18) 宇野弘蔵『資本論入門』47ページ。

っていない、つまり論理の歩みと歴史の歩みとが前者では一致しているが、後者では一致していないということである。たしかに、『資本論』の「貨幣の資本への転化」の篇は、教授のいわれるように「資本の一般的定式」を「中心に¹⁹⁾」説かれており、そこでの論理の展開は単純に資本の「発生史的な発展順序」を示すものとはなっていない。前節でみたように、産業資本の歴史的前提としての商人資本や高利資本は、この篇ではマルクスによってむしろ意識的に捨象されていたのである。したがって、対象の歴史的発展過程との対応という観点からすれば、『資本論』では「商品と貨幣」の場合と「貨幣の資本への転化」の場合とは理論的展開の仕方が相違しているという宇野教授の指摘は、そのかぎりではまったく正当であるということができよう。そして、われわれは、まさにこの両者の説き方の相違にこそ、『資本論』の「貨幣の資本への転化」の分析を理解する鍵がひそんでいると考えるのであるが、宇野教授は、われわれとは「まさに逆」に右の「説き方」の相違の点に、いいかえれば「貨幣の資本への転化」の篇の理論的展開が、「商品と貨幣」の場合とは異なって、対象の歴史的発展過程に対応していないという点に、むしろ『資本論』の「難点」をみいだされているのである。すなわち、教授によれば、『資本論』は商品・貨幣・資本の「3段の展開」をなしてはいない、つまり第1篇と第2篇との間には「方法的断層²⁰⁾」が存在するというのである。宇野教授がのちに『資本論』のこの「難点」をいかに「解決」され、それによって「方法的断層」をいかに「克服」されたか、その仕方はすでに周知のところであろう。すなわち、教授の『経済原論』(上巻、1950年)にあっては、「貨幣の資本への転化」はいわゆる「流通形態」としての資本の3形式論として説かれ、資本の具体的な「歴史的形態に対応した理論的把握」が試みられている。そこでは、まず「『商人資本』の $G-W-G'$ の形式が資本の一般的定式をなす」ものとされ、「貨幣の資本への転化」はこの「 $G-W-G'$

の商人資本的形式から $G\cdots G'$ の金貸資本的形式を経て $G-W\cdots P\cdots W'-G'$ の産業資本的形式を展開²¹⁾」することによって「完成²²⁾」するものとされている。したがって、ここでは「商品・貨幣の場合と同様に理論的にも〔具体的な資本の——引用者〕発生史的な発展順序を示す²³⁾」ものとなっている。つまり、教授の「解決」は、『資本論』における「商品と貨幣」の場合と「貨幣の資本への転化」の場合との展開方法の相違を解消し、両者を同一視することによってなされているのである。

宇野教授はいわれる、「『資本論』は、この《貨幣の資本への転化》を、明確に商品・貨幣に続く形態規定として十分には展開しえなかった²⁴⁾」と。では、なぜそうなのかといえ、教授はその理由を「マルクスが『資本論』を商品をもって始めながら、商品・貨幣・資本の諸形態を純粹の流通形態として展開しえなかった²⁵⁾」という点に求められている。なぜなら、教授によれば、「純粹の流通形態」としての商品は、それ自身における「価値と使用価値との対立矛盾²⁶⁾」を「上向の動力²⁷⁾」ないしは「発展の動力²⁸⁾」として、「貨幣形態を、更に進んで資本形態を必然的に展開²⁹⁾」するものなのであり、しかもこの「純粹の流通形態」としての商品・貨幣・資本の展開は、同時に「商品経済の発展の過程を抽象的に反映することにならざるをえな³⁰⁾」いからである。だから、こういうことになるであろう。商品・貨幣を宇野教授のように「純粹の流通形態」として把握すれば、それは「必然的に」資本の3形式を展開せざるをえないものとなり、しかも同時に資本の「発生史的な発

の転化》——産業資本の論理的展開について(1)——」『社会科学論集』(埼玉大)第8号、126ページ。

21) 『方』316ページ。

22) 宇野弘蔵『経済原論』上巻(以下『原』と略)81ページ。

23), 24) 『方』316ページ。

25) 『方』314ページ。

26) 宇野弘蔵『経済学演習講座・経済原論』(以下『講』と略)29ページ。

27) 『講』8ページ。

28) 『講』29ページ。

29) 『講』24ページ。

19) 宇野弘蔵『資本論入門』47ページ。

20) 鎌倉孝夫『資本論』における《貨幣の資本へ

展順序を示す」ものとなるのに、『資本論』の場合に第1篇と第2篇との間に「方法的断層」を生じ、「貨幣の資本への転化」の篇において論理と歴史との不一致をきたさざるをえなかったのは、じつにマルクスが商品・貨幣および資本を「純粹の流通形態」として把握しえなかったからである、と。

III

前節であきらかになったように、「貨幣の資本への転化」の問題をめぐるマルクスと宇野教授との相違は、結局は商品・貨幣・資本を教授のように「流通形態」として把握するか否かに起因するものということができよう。だが、宇野教授のいわゆる「流通形態」論に対しては、すでに多くの批判がなされているので、ここではただ教授のいう「流通形態」論の展開と商品経済の歴史的発展との「抽象的」対応とは単なるトートロジーにすぎないことを指摘するにとどめよう。

周知のように、宇野教授は、かねがね商品・貨幣・資本を「資本の生産過程」(「生産論」)より以前に、しかも「資本の生産過程はもちろんのこと、如何なる生産過程をも前提としない³¹⁾」で「流通形態」(「流通論」)として説きうるし、また説かねばならないと主張されているのであるが、その際、教授はその「根拠³²⁾」をそれら商品・貨幣および資本——商人資本と高利資本——が資本主義以前に種々異なった生産関係のもとで流通界に出現しえたという歴史的事実に求められている。

だが、宇野教授によるこの「流通形態」論の「根拠」づけは、二重の意味において正しくないであろう。なぜなら、第1に、われわれが商品・貨幣を理論的に資本より以前に説かねばならないのは、教授のいうように商品・貨幣が歴史的に資本にさきだって出現した、いいかえれば資本の歴史的出発点ないしは前提であったからではない。そうではなくて、単純な商品・貨幣が理論的に資本の最も簡単な要素であり、資本の論理的前提=基礎をなしているからである。また第2に、商品・貨幣が歴史的に資本主義以前に種々異なった

生産関係のもとで流通界に現われたという事実は、商品・貨幣を宇野教授のように理論的に生産関係から抽象された「流通形態」として説かねばならぬという必然性をなんら証明するものではない。むしろ反対に、単純な商品・貨幣の考察に際しては、理論的に単純な商品生産関係が、あるいは私的所有関係が前提されねばならない。なぜなら、市場に交換者として登場しうるためには、いうまでもなく人びとはあらかじめ商品形態にせよ、貨幣形態にせよ、ともかく対象化された労働時間としての交換価値の所有者となっていなければならないからである。なるほど、「かれらがいかにして商品の所有者となったか³³⁾」という「商品の生成過程、したがってまた商品の本源的取得過程³⁴⁾」は「単純な流通の背後で起っており、それが始まるまでに消えうせている1過程³⁵⁾」ではある。だから、この過程の考察は、一見したところ宇野教授のいわれるように「単純な流通の考察には属さないようにみえる³⁶⁾。」けれども、このことは「私的所有が流通の前提³⁷⁾」であるという事実をなんら排除するものではない。なぜなら、「流通の観点からは、他人の商品、したがって他人の労働は自己労働の譲渡によってのみ取得されるのであるから、流通の観点からは流通に先行する商品の取得過程は必然的に労働による取得として現われ³⁸⁾」ざるをえないからである。したがって、「労働と自己労働の産物に対する所有は、それなくしては流通による第2次的取得が生じない根本前提として現われる³⁹⁾」のであり、しかもこの前提は「流通それ自体の考察から生じる、なんら恣意的でない前提⁴⁰⁾」なのである。

いずれにせよ、商品・貨幣・資本は歴史上資本主義以前に特定の生産関係とは必然的な関連なしに「流通形態」として出現したから、理論的にも「資本の生産過程」より以前に「流通形態」として「特殊の生産関係を前提することなしに展開さ

33), 34), 35) Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie. bes. v. MEL-Inst. Moskau. Berlin, 1953. (以下 Gr. と略) S. 902.

36) Gr. S. 903.

37) Gr. S. 902.

38) Gr. S. 903.

39) Gr. S. 902.

40) Gr. S. 904.

30) 宇野弘蔵「経済学と唯物史観」『経済評論』1954年4月号, 5ページ。

31) 『方』152ページ。 32) 『講』21ページ。

れ⁴¹⁾」ねばならないという宇野教授の主張は、「流通形態」論の「根拠」を商品経済の歴史的発展過程に求めるという点で、一見きわめて唯物論的にみえるけれども、実は単なるトートロジーにすぎないものであり、しかもそれは、商品・貨幣の理論的展開は発達した資本主義社会の分析によってではなく、資本主義以前における商品経済の歴史的発展過程の跡を辿ることによってのみはじめて可能であり、しかもこれとかならず一致せねばならぬとみる点で、また商品・貨幣を一定の社会的生産関係を表現する物的形態としてではなく、生産関係を捨象した、あるいは生産的基礎から「遊離」した単なる抽象的存在にすぎない「流通形態」として把握する点で、いわば二重の誤りを冒しているのである。すでにべつのところでも述べたように⁴²⁾、総じて客観的な歴史的過程をそのまま理論的思惟の過程とみなすことによって、両者の区別を解消するというのは、宇野教授の所説のきわだった特徴のひとつをなしている。「流通形態」論は、その原基形態というべきであろう。

とはいうものの、宇野教授の「流通形態論」の主張は、以上ですべてではない。なぜなら、教授は、他方では「純粹の流通形態」としての商品・貨幣・資本は発達した資本主義社会からの抽象物、あるいは「原理論」で想定される「純粹資本主義」の抽象的規定であり、したがってそれは資本主義以前の具体的な商品・貨幣・資本とはその生産的基礎を異にする点で、「実質的⁴³⁾」には異なるということを強調されているからである。けれども、教授による両者のせっかくの区別も、結局は無駄であるばかりか、無意味なものである。なぜなら、教授の「流通論」にあっては、ただ商品・貨幣・資本の「形態」だけが問題であり、したがってそれらが具体的にどのような生産関係のもとで出現したか、その生産的基礎における「実質的」相違はなんら問題ではなかった筈だからである。だから、教授自身も、一方では発達した資本主義社会からの抽象物と歴史上の具体的な商品・

貨幣・資本との「実質的」相違を強調されながらも、他方では自己の「流通形態論」の方法を首尾一貫させるために、両者は「実質的」には異なるにしても「形態的」には、すなわち生産的基礎から抽象された単に市場=交換関係を現わすにすぎない「流通形態」としては全く同一——「同じ抽象物⁴⁴⁾」——であることを力説せざるをえないという、したがって両者の「実質的」区別を結局は解消せざるをえないという羽目におちいつているのである。このように、教授のいう「純粹の流通形態」としての商品・貨幣・資本が「形態的」には歴史上の具体的なそれら諸形態と全く同一であるとするれば、かかる「流通形態」論の展開が商品経済の歴史的発展と一致せざるをえないのは、もはや自明の理というべきであろう。というよりもむしろ正確には、かかる一致が生ぜざるをえなかったのは、さきにみたように宇野教授が「流通形態」論の展開を資本主義以前の諸社会の表面的過程における商品・貨幣・資本の歴史的出現によって「根拠」づけたからなのであって、その逆ではない。教授のように「流通形態」としての商品・貨幣・資本を商品経済の歴史的発展過程に対応させて「展開」すれば、両者が一致するのは当然であろう。教授の「貨幣の資本への転化」論にあっても、まったく同様である。教授のように、資本の「歴史的形態に対応した理論的把握」を試みるならば、それが資本の「発生史的な発展順序を示す」ことになるのは自明である。両者は単なるトートロジーにすぎない。

IV

ところで、宇野教授のいう「流通形態」論が以上にみたようなものであるとすれば、かかる「流通形態」としての商品・貨幣が教授のいうように資本を、それも「資本の近代的基本形態」としての産業資本を「必然的に展開」するものとはなりえないことは、きわめてあきらかであろう。教授は、「原理論」では「理論的展開の前提となるのは、商品・貨幣と資本の2形式〔商人資本と金貨資本——引用者〕とに過ぎない⁴⁵⁾」といわれる。これ

41) 『講』21ページ。

42) 前掲拙稿。

43) 『講』24ページ。

44) 『講』29ページ。

45) 『講』78ページ。

46) 『方』51ページ。

ら「流通形態」が、教授の場合に、「実質的」にはともかく「形態的」には資本主義以前の具体的な商品・貨幣・資本と全く同一のものとして把握されていたことは、すでに前節でみたとおりである。だが、周知のように、資本主義以前の種々異なる社会構成のもとで、その部分的・従属的過程としてのみ存在しえた単純な商品=貨幣流通は、それ自身のうちに資本主義的生産様式への、したがってまた前期的資本としての商人資本や高利資本は産業資本への「必然的」な「発展の動力」をもたないし、また現にもちえなかった。しかも、この点は他ならぬ宇野教授自身が強調されているところでもある。教授がいわゆる単純商品生産の資本主義的生産への成長転化論を排撃されて、封建制から資本制への移行期としての資本の原始的蓄積過程の意義を力説されるのも、あるいはまた「原理論」と「段階論」の峻別を強調されるのも、まさにこの点にかかっている。たしかに、われわれは、教授のいわれるように、種々異なる社会構成のもとで反復出現した商品=貨幣流通の、したがってまた前期的資本の発展を直ちに資本主義的生産様式の歴史的発生過程とみなすことはできない。その意味では、教授が「商人資本から産業資本……への発展は、資本がそれ自身に展開するものではない⁴⁶⁾」とか、あるいは「具体的な商人資本や金貸資本からは必ずしも産業資本としての $G-W \cdots P \cdots W'-G'$ の形式を展開するとは限らない。歴史的には……資本の原始的蓄積の過程がその展開の条件をなす⁴⁷⁾」といわれるのは、まったく正当であるということができよう。だが、もしそうだとすれば、このように産業資本への「発展の動力」を「それ自身」のうちにもってはいない歴史上の「具体的な商人資本や金貸資本」と「形態的」には全く同一のものとされている教授のいわゆる「純粹の流通形態」としての商人資本や金貸資本は、「展開の条件」としての一定の歴史的過程を前提することなしに、いったいいかにして産業資本を「必然的に展開する」ことができるのであろうか。「形態」だけが問題であるという教

47) 『原』47 ページ。

授の「流通形態」論の主張からすれば、前者が不可能であれば、「形態的」にはこれと全く同一のものとされている後者もまた当然不可能とされねばならない筈である。つまり、「流通形態」としての商人資本や金貸資本からの産業資本への「必然的展開」は、教授の「流通形態」論の方法それ自体によっても必然的に否定されざるをえないのである。

だが、これに対して教授は、あるいはつぎのようにいわれるかも知れない。「原理論」では、発達した資本主義社会あるいは「純粹資本主義」が研究対象として前提されている。「原理論」で展開される「流通形態」は、かかる「純粹資本主義」の抽象的規定としての「純粹の流通形態」である。したがって、それはそれ自身のうちにすでに資本主義的關係を「含蓄⁴⁸⁾」しており、産業資本への「発展の動力」をもっている。これに反して、歴史上の具体的な商品・貨幣・資本は「実質的な面では」「商品経済とは直接関係のない社会関係によっても影響され、支配され⁴⁹⁾」ている、いわば「不純」な「流通形態」である。したがって、それはそれ自身のうちに産業資本への「発展の動力」をもたない、と。みられるように、ここで「発展の動力」の有無は、「流通形態」の「純粹」「不純」といった両者の「実質的な面」での相違に求められている。けれども、「流通形態」がたとえ「純粹」であろうとなかろうと、両者は教授によって「形態的」には全く同一であるとされているのであるから、その一方がそれ自身のうちに資本主義的關係を「含蓄」しており、産業資本への「発展の動力」をもっているとすれば、他方もまた当然そうであるとしなければならない。なぜなら、教授の「流通形態」論にあっては、くり返すように、「実質的な面」での相違はなんら問題ではなかった筈だからである。したがって、教授自身の「流通形態」論を首尾一貫させるならば、今度は教授はみずからの論理によって、歴史上の具体的な商品・貨幣・資本はそれ自身のうちに産業資本への「発展の動力」をもたないという教授

48) 『講』77 ページ。 49) 『講』25 ページ。

自身が強調されている明白な歴史的事実を否定せざるをえない結果となるのである。

以上、われわれは宇野教授の「流通形態」論を前提すれば、それがいかに不合理な結果に導かざるをえないかをみてきたが、他方では、「純粹の資本主義社会」は「原理論」の研究に「絶対的に必要な想定⁵⁰⁾」であるという教授の主張からすれば、教授の「流通形態」論それ自体の展開がもともと不可能なのである。この点はすでにべつのところでも述べた⁵¹⁾が、ここではこれを教授の「貨幣の資本への転化」論について立証してみよう。

理論上、「純粹資本主義」を前提すれば、「貨幣の資本への転化」が必然的に生じるというのは事実である。けれども、それは宇野教授のいうように商品・貨幣がそれ自身のうちに資本関係を「含蓄」し、したがって資本への「発展の動力」をもっているからではない。そうではなくて、商品経済の全面化している「純粹資本主義」のもとでは、労働力商品はすでに市場に現存するものとして前提されており、したがってそこでは「貨幣の資本への転化」のための条件が与えられているからである。現に、この点は教授自身も認めているところである、「労働力の商品化は、研究の対象となった資本主義社会ではすでに確立されている⁵²⁾。」商品・貨幣は、理論的にも歴史的にもそれ自身でひとりでに資本に転化しうるものではない。それらは単に資本にとっての「要素的諸前提」または「可能性からみて資本になる諸形態⁵³⁾」にすぎない。それらは一定の条件が存在する時にのみ、はじめて資本に転化する。労働力の商品化を前提とする貨幣と労働力との間の交換は、貨幣の資本への転化の「第1歩⁵⁴⁾」であり、その「本質的条件⁵⁵⁾」である。もちろん、労働力の商品化というこの前提条件は単なる商品・貨幣とともにけっして存在しない、「1つの世界史を包含」する「歴史的条件⁵⁶⁾」である。したがって、『資本論』では、マルクスは「貨幣の資本の転化」の謎——

いわゆる「一般的定式の矛盾」——を商品・貨幣の場合と異なり、貨幣から資本を「単純に『演繹』する」ことによってではなく、歴史的与件としての労働力商品を導入することによって、いいかえれば「研究の領域に歴史的条件をひき入れる⁵⁷⁾」ことによって解決したのである。宇野教授は、かねがね「経済学の原理的展開自身が弁証法の論理的展開を与える⁵⁸⁾」といわれている。だが、「貨幣の資本への転化」を教授のによつて、それ自身のうちに「上向の動力」をもつ「流通形態」としての商品・貨幣・資本が産業資本を自己導出する過程、いいかえれば単なる可能的資本ないしは資本の前提=基礎にすぎない貨幣が、なんらの条件もなしにそれ自身で資本を「必然的に展開する」ものとみなすならば、そしてこれが教授のいう「弁証法の論理的展開」を示すものとするならば、われわれは、これに対してマルクスとともにつぎのようにいふべきであろう。「弁証法的叙述形態が正しいのは、それがみずからの限界を知る場合のみである⁵⁹⁾。」念のためにいえば、この言葉は、マルクスがほかならぬ「貨幣の資本への転化」の「条件」について論じている際に、述べられたものなのである。

いずれにせよ、発達した資本主義社会を前提すれば、「転化」の前提条件である労働力の商品化はすでに与えられている。すでに述べたように、この場合にのみ、「貨幣の資本の転化」はブルジョア社会の「観察者の立場⁶⁰⁾」に立つ「われわれにとって⁶¹⁾」必然的に生じるものとなる。他方では、発達した資本主義社会を前提すれば、そこでは商業資本や利子うみ資本はもはや産業資本の派生的形態としてのみ存在するにすぎない。そこでは生産力と商品経済の未発展の状態に照応する前期的資本は、もともと存立しうる基盤が存在しない。したがって、商品経済の全面化が想定されている「純粹資本主義」と前期的資本とは、形式論

57) ベ・ア・グルーシン「マルクスの『資本論』における論理的および歴史的な研究方法」『思想』1956年第1号39ページ。

58) 『方』152ページ。

59) Gr. S. 945.

60) Gr. S. 172.

61) Gr. S. 945.

50) 『方』17ページ。 51) 前掲拙稿参照。

52) 『講』77ページ。 53) Gr. S. 938.

54) Gr. S. 944. 55) K. II. S. 27.

56) K. I. S. 178.

理からいってもけっして両立しうるものではない。ところが、宇野教授は、つぎのようにいわれる、
 「 $G-W-G'$ の形式の資本の価値増殖は、直接的な流過程における不等価交換によって行われるものであって、商品経済の原則に矛盾する。いい換えれば商品経済が完全に行われる限り、資本は一般的にかかる形式に留まることはできない。 $G \dots G'$ も、その価値増殖をかける直接的な流過程においては行わないにしても、それをその外部に前提するものであって、貨幣の資本への転化をこの形式自身のうちに完成するものではない。第3の形式は、その価値増殖を流過程において、しかも直接的流過程においてでなく実現するものとしてあらわれ、これを完成するのである⁶²⁾。」
 これが、『資本論』の第1巻・第1篇および第2篇を「純粋の流通形態として展開しえなかった」としてマルクスを非難される教授自身の「貨幣の資本への転化」論のすべてなのである。けれども、この「転化」論のすべては、「商品経済が完全に行われる」「純粋資本主義」が「絶対的に必要な想定」であるという教授自身の「原理論」の「原則に矛盾する」ものである。なぜなら、「純粋資本主義」の前提のもとでは、教授のいう資本の商人資本的形式も金貸資本的形式ももともと存立しうる余地がないからである。教授は、商人資本的形式の資本の価値増殖は不等価交換によらざるをえないから、「商品経済的に合理的根拠を有するものではない⁶³⁾」といわれるが、「合理的」であろうとなかろうと、「純粋資本主義」の前提のもとでは、この資本の価値増殖それ自体が不可能なのである。だいたい、価値実体論をあらかじめ説くことができない、いな説いてはならない教授の「流通論」において、どうして等価交換が「商品経済的に合理的」であると断定することができるのであろうか。また、価値概念なしに、どうして等価・不等価の交換が語れるのであろうか。さらにまた、教授は、金貸資本的形式の資本はその価値増殖を「外部に前提する」といわれる。だが、教授の「流通形態」論にあっては、資本の生産過

程はもちろんのこと、いかなる生産過程をも前提してはならないのであるから、この「外部」は「前提」しようにももともと存在しえないのである。したがって、金貸資本的形式それ自体が理論上存在しえない。だとすれば、このような金貸資本的形式がどうして「必然的に第3の形式を展開⁶⁴⁾」し、「貨幣の資本への転化」を「完成」することになるのか、われわれはまったくその理解に苦しまざるをえない。

要するに、宇野教授の「原理論」にあっては、「流通形態」としての資本の商人資本的形式や金貸資本的形式は、「純粋資本主義」が前提されるかぎり、もともと存立しえないし、したがって教授はこれを説いてはならなかったのである。けれども、「貨幣の資本への転化」論において、教授があくまでもこの「流通形態」としての資本の3形式論を固執されるのであれば、教授は「原理論」に「絶対的に必要な想定」であると主張される「純粋資本主義」の前提それ自体を放棄しなければならぬであろう。けれども、その場合には、教授の「貨幣の資本への転化」論はもはや資本主義的生産の単なる歴史的生成論に、しかも単純な商品=貨幣流通の資本主義的生産への、あるいは前期的資本の産業資本への流通主義的な自動的成長転化論に変質せねばならなくなるであろう⁶⁵⁾。しかしながら、この退路は遺憾ながら教授にあっては閉ざされている。なぜなら、さきにみたとおり、単なる商品=貨幣流通の、したがってまた前期的資本の発展が直ちに資本主義的生産様式の成立に導かないことは、明敏な教授自身が強調される場所であったからである。したがって、われわれは、いまやつぎのように結論することができるであろう。宇野教授は、その「原理論」における「純粋資本主義」の前提と「流通形態」論との二律背反を、後者の放棄によってのみはじめて克服することができるし、また克服することが必要なのである、と。

64) 『原』81ページ。

65) この道を歩んだのが周知のように鈴木鴻一郎教授=岩田弘氏らである。前掲拙稿参照。

62) 『原』81ページ。 63) 『原』74ページ。